

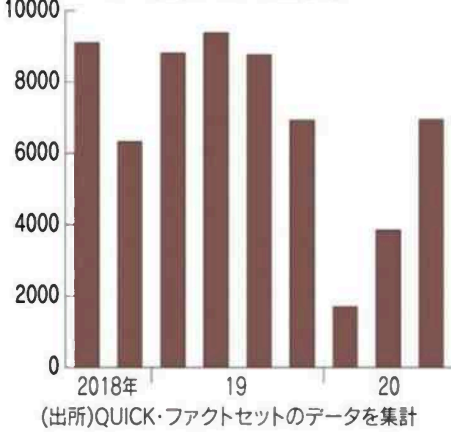
中国・アジア 増益に転換

世界景気回復けん引 7~9月業績

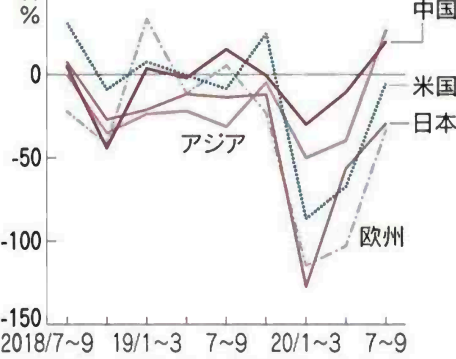
企業業績の新型コロナウイルスからの回復に差が出ている。世界の主要企業の2020年7~9月期は、純利益が前年同期比9%減となった。経済再開が進み、4~6月期の同6割減から改善した。中国とアジアが増益に転じた一方、日欧は3割減益だった。欧米が感染再拡大に直面する中、中国・アジアが全体に占める比率は3割を超え、けん引役となっている。

日欧は3割減益

企業業績は回復しつつある
(世界企業の純利益合計)



中国・アジアは増益に転じた
(純利益の前年同期比増減率)



(注) 日本は3月期本決算企業(新興や親子上場の子会社など除く)
(出所) 海外はQUICK・ファクトセット

1スで過去最高だった。米国は巨大IT企業が下支えする。米国は全体では5%減益となったが、利益額の大きいアマゾン・ドットコム、アルファベット、フェイスブックの3社は増益を確保した。アップルを加えた4社を除くと減益幅が9%と拡大する。

世界貿易機関(WTO)の予測では20年の貿易量が前年比9.2%減となる見込みで、企業業績は内需との関係が強まっている。景気回復が遅れ、ITの存在感も小さい日欧は、日本(29%減)、欧州(33%減)と落ち込み。欧州は比率の大きいエネルギー関連が不振だった。

日本は前年同期と消費増税前の駆け込み需要があった反動に加え、「7月の感染再拡大で外出を控える傾向が強まった」(東武鉄道の三輪裕章取締役)ことで運輸関係の落ち込みが目立つ。製造業も足踏みが続く。ファナックは7~9月に13%増益となったが、「日本の設備投資の

様子見感が強い」(山口賢治社長)。地域別売上が高は中国や米州が4~6月期を上回った一方、日本は減少が続いた。ただファナックや村田製作所、コマツといった製造業を中心に、21年3月期の業績予想を上方修正するなど明るい兆しも出てきている。

欧米の7~9月のGDPはコロナ禍前の水準には届かない。回復途上で感染者が再拡大しロックダウン(都市封鎖)せざるを得ないなど、「スロウダウンを少し深押しする可能性が出てきている」(クレディ・スイス証券の松本聡一郎氏)。

現時点の市場予想では、世界企業の10~12月期の純利益は前年同期比横ばいまで回復する見通し。中国とアジアは10~12月期も増益を維持する

近づきつつある。株式市場でも中国の時価総額が急拡大している。

QUICK・ファクトセットの企業財務データを使い、約1万2000社の実績や市場予想を調べた。7~9月期の純利益は6950億ドル(約73兆円)と前年同期比で9%減った。1~3月は同81%減、4~6月は同59%減で、減益幅は徐々に消費が戻り、養豚の牧原食品の純利益は約6.6倍、白酒製造大手の貴州茅台酒は7%増、電気自動車の比亞迪(BYD)も約15倍となった。

業種別で好調なのがIT関連だ。中国のパネル大手の京東方科技集団(BOE)の純利益は約7倍に拡大。アジアでは台湾積体電路製造(TSMC)の純利益が四半期ベ

縮小してきている。7~9月期に増益に転じたのがアジア(前年同10%増)と中国(同10%増)。特に中国は唯一の増収(8%増)に転じた。実質国内総生産(GDP)が4.9%増と景気回復で先行企業業績にも表れている。消費が戻り、養豚の牧原食品の純利益は約6.6倍、白酒製造大手の貴州茅台酒は7%増、電気自動車の比亞迪(BYD)も約15倍となった。

業種別で好調なのがIT関連だ。中国のパネル大手の京東方科技集団(BOE)の純利益は約7倍に拡大。アジアでは台湾積体電路製造(TSMC)の純利益が四半期ベ